

鶴見文化財学会報

Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.1

2000年3月31日発行
鶴見大学文化財学会

鶴見大学文化財学会の開設

会長 大三輪 龍彦

平成11年の秋、鶴見大学文化財学会はその第一歩を踏み出した。昭和38年、私がまだ学習院大学史学科の3年生に在学中、学科開設から3年目を迎えて学習院大学史学会を発足させるべく、第1期生であった私もその準備を進める委員会の一員であった。といっても学会とは何であるかもよく知らない一学生であった私は、恩師の指示によって動くだけで精一杯であったというのが実情であった。

それでも会報の創刊の準備をすべて任されて印刷所を探すことから始めたのだが、それまではせいぜい謄写版印刷で文集を作るぐらいが関の山であった学生にとって、印刷所捜しだけでも大変な仕事である。そうしたときにふと思いついたのが、昭和36年に日本考古学協会の特別委員会によって行われた三殿台遺跡の発掘調査でお世話になった塚田光氏のことであった。氏は下総考古学会を主宰しておられたが、その本業は印刷業である。早速、高田馬場にあった塚田さんの印刷所を訪ねた。そこでいろいろと印刷に関する教示を得て、なんとか会報の第1号を発刊できたことを今でも覚えている。今にして思えばどうということもないが、今また本学の文化財学会の発足にあつ

てなぜか懐かしい。

学会をなぜ作るのか。同じ学問を志す仲間が集まって、会員相互の親睦や研究情報を交換することはいうまでもない。学会と言うのは、社会から見ればある種の同業者集団である。同業者集団というのは、時には排他的になる性質を持っているといえよう。特に一つの大学を単位とする学会が排他的になると、それはもう学閥である。これも学習院大学史学会の準備を進めているときのことであるが、恩師の安田元久先生が、「君ね、学会というところはすぐに学閥ができるところだが、学閥というのは学問の発展のためには障害にはなっても、決してためになるものではないよ。学問にとって大切なのは学統を残すことなのだよ。良い学統を残すために学会を作るのだということを忘れないように。」といわれた。今、新しい学会を作るにあたって改めてこの言葉を思い出す。幸いにして、我が文化財学科は文献史学、物質史学、自然科学を総合した学際的な学科であり、そこを核として発足した鶴見大学文化財学会も良き学統をいつまでも残し続けていけるものと確信している。この新しい学会に大きく期待している。(本学教授)

文化財学会に期待するもの

石井 進

鶴見大学文化財学会がいよいよ誕生しました。まことに喜ばしい限りです。

文化財学とは、まさに現在の日本に求められている新しい学問であります。しかし全国の大学でも文化財学科を名乗っているところは少数で、これが文化財学だといえるような決定版など、まだどこにも出来ていません。

鶴見大学でも文化財科学や考古・美術、歴史・地理など様々な分野の先生方が、講義や実習・演習を通じて、新しい文化財学をつくり出そうと努力しておられる最中ですが、その事業はまだ始まったばかりと申せましょう。ちょうどその時、文化財学会が設立されたことは大きなはげましであります。学会と協力しつつ鶴見大学らしい文化財学をつくり上げて行くことができれば最高ということになります。

もちろん活動の主体は会員の皆さんであり、それを代表する委員の方々のご努力にまたなくてはなりません。お誘いがあれば私も応分のご協力を惜しむ者ではありません。

すでにいくつかの部会が成立し、それぞれに活動を開始されたようです。私は昨年12月23日、博物館部会の神奈川県立博物館見学の催しに参加しました。ずっと昔、自然系分離以前の県博には何度か行っていますが、リニューアル後ははじめてです。特に観客としては見ることのできないウラ部分、保守管理部門を拝見

させて頂いたのは大変興味深いものでした。参加者の皆さんもきっとそうだったと思います。これからも随時、各地の博物館を見学されるとのことで、私もぜひ参加して楽しみながら勉強したいと考えています。

また鎌倉研究部会も発足したと聞きました。鎌倉は大学にもっとも近い古文化財の宝庫であり、重要な史跡です。文化財学科の一年時の実習でも何回か巡検に行っていますが、まだまだ見学すべき所はいくらでもあります。また次々に行われている発掘調査によって、新しい事実が続々と判明しています。大学の先生方には大三輪先生、河野先生をはじめとして、その中心的役割を果たしておられる方々が何人もおられますので、鎌倉は鶴見大学らしい文化財学をつくり出すための最もよいフィールドになることでしょう。その意味でも大きな期待が寄せられると思います。

その後、2月28日に鎌倉研究部会の巡検に参加しました。鎌倉と三浦半島を結ぶ重要な通路、また防衛の要地だった名越坂付近を中心に、今もよく残る中世の切通や切岸、やぐら群や石廟などを大三輪先生、河野先生のご案内で見学した後、鎌倉の大明の谷に下り、東勝寺跡、幕府跡を廻って解散しました。大変に楽しく、また有意義な会だったと思います。今後の発展を楽しみにしております。

(本学客員教授)

設立総会に参加して

—新しい小さな第一歩—

文化財学科2年 富川 武史

鶴見大学文化財学会は、昨年（1999）10月16日土曜日午後2時半をもって発足しました。会則案が提示され、何箇所かの訂正を経て、採択されました。ホッと一息ついた時、我々学会委員にとって思いがけないことが起こりました。メンバー全員壇上に上がれ、という命令が下ったのです。どうやら名前の紹介だけでは誰だかわからないから、みんなに顔を見せろと、いうことらしい。不意を突かれた我々は互いに顔を見合わせながら渋々壇上に上がりました……。

その後、いよいよ記念講演が始まりました。今回お招きしたのは、東京工業大学名誉教授の福田豊彦先生。題は「鉄の語る日本史」で、2時間にわたってご講演していただきました。

①日本での製鉄は、弥生時代後期から末期にかけて始まり、技術の普及に伴い各地で行われるようになったこと。②中世になると、その生産は中国地方と奥羽地方に集中し、「たたら製鉄」と呼ばれる古代製鉄法が誕生したこと。③砂鉄と木炭を交互に層状に投入するこの製鉄法で生産された和鉄は、スラグ（チタンが変化したもの）などの不純物が極めて少なく、純度の高い鉄であったこと。中でも日本刀の材料としての有名な玉鋼は研ぎ易いことや鋭い切れ味などの特徴を備えていること。④このたたら製法は戦後廃絶状態になったが、近年、技術の保存を目的として復元されたこと。

島根県吉田村はかつてたたら製鉄による和鉄の一大生産地で、現在、大正末期まで活動していた菅谷たたらが国の文化財として保存公開されていること。

以上のようなことが報告の骨子でした。

今回、福田先生は、和鉄の種類やその製法を中心に講演され、自然科学と鉄の関係に興味をそそられました。又、我々が専門に学んでいる文化財と密接に関わっていることを改めて学びました。この講演の内容は保存科学を専攻としない人でもきつと役に立つと思います。今回の貴重な体験を無駄にしないよう、自分自身も役に立てていくつもりです。

講演終了後は、大学の3号館にある学食（シダックス）で懇親会が開かれました。思ったよりかたい雰囲気はなく、開始わずか10分で酔っぱらいが出るなど和やかに進行。しかし、学会員の代表として話すことになっていた自分一人がその雰囲気に入ることができませんでした。みんなのフォローもあって、無事話し終えることができたので良かったのですが、かなり緊張しました。

又、先生方もいろいろご挨拶され、学生達との交流も深まったようです。最後は河野先生の「文化財学会万歳！」で締めくくり、長かった一日が終わりました。約一カ月前から準備をすすめてきた文化財学会設立大会はようやく幕を閉じました。

研究部会報告

博物館研究部会

文化財学科2年 宇田川雅美

博物館研究部会の目的は、博物館の見学・研究を行い、博物館に対する理解を高め、博物館学芸員に向けて知識を修得することです。

第1回目の活動は、石井先生と一緒に神奈川県立博物館に行きました。学芸員の方々に細かく内部を案内してもらい、見学させていただいたのは、資料の搬入口、収蔵庫、セキュリティシステム、ボランティアの方々の控え室です。それから、学芸員の方々からの企画展示をするまでの経緯・県博の成り立ちについて話をしてもらいました。博物館も普段入れない場所まで入り、県博の前身横浜証金銀行のなごりがあちこちに残っていたのに驚きました。例えば、搬入口・エレベーターの狭さで、資料を展示室まで運ぶのに苦労するそうです。

これからの活動としては、横浜市博物館・金沢文庫に行く予定です。また、個人で各地の博物館を訪ね、今の博物館のあり方・利用者に対する展示工夫などについて皆で討論もしたいと考えています。

部員数が少ないので、博物館に興味がある人や、学芸員の仕事に興味がある人は是非、参加して下さい。待っています。

鎌倉研究部会

文化財学科2年 川崎 大樹

鶴見大学は鎌倉から近い位置にあるため、文化財学科では鎌倉の研究が盛んです。よって今回文化財学会が設立された中で、私達は、「鎌倉を研究する部会」が学会の中になければならないと考え、鎌倉研究部会を設立しました。

研究部会の目的は、考古・美術・文献などの様々な観点から「中世都市鎌倉」を研究し、その姿をあらわにしていく事です。活動内容の一つ目は、実際に鎌倉を歩いてまわること。歩いてまわれば地名や場所も覚えやすいし、現地を歩かなければ分からない新たな発見があるからです。基本的には『吾妻鏡』や近世の日記などの文献に記された「歴史」に沿って歩くことを主としていますが、それだけにとらわれず行くこともあり、その時の状況いかんで判断しています。時には文化財学科の先生方を招いて一緒に歩くこともあり、巡見後には個々の成果を発

表する予定です。又、写真を撮った人は写真を部会に提供し、映像の記録も残します。二つ目は、鎌倉関係の展覧会や史跡・発掘現場を見学し、当時の人々の生活・風習などを考えます。三つ目は他部会との交流で、情報を交換することでお互いの知識を深め合います。

今までの活動としては河野先生といくつかの発掘現場を見学した他、会員達で何度か現地をまわっています。今後はこれらの事を継続するのはもちろんの事、成果を会誌に載せるなどして文化財学会の発展に貢献していきたいと考えています。又、成果を研究部会独自の「部誌」という形で発表する予定です。

専門知識は必要ありません。鎌倉について勉強したい人はもちろん、興味のある人、親しみたい人もOK。是非、鎌倉研究部会にお越し下さい。

史跡・遺物研究部会

文化財学科2年 篠原 秀幸

私たちは、人間の歴史とその足跡を研究することなどを目的として、史跡・遺物勉強会なるものを文化財学会の中に作り活動しようと考えている。

文化財学科の学生の中で、歴史学・考古学などに興味をもつ人たちと、遺跡・遺物などの文化財あるいは各自の住む地域の歴史・生活史などについて論議を重ねてきたので、今後は各自がそれぞれの研究テーマを深めていきたい。

具体的な活動内容は①遺跡・遺物の観察や検討(遺物の変遷・分布などについて)、②地域の歴史の検討・比較、人間の生活史の勉強(事例・テーマを決めて)、③環境史と人間生活史についての関係について。現地踏査およびその保存・活用など様々考えている。

各自になるべく無理のないよう活動していくので興味のある方は参加されたい。考古学・生活史などへのエンタランス的な活動もできるかと思うので、興味をもちはじめた方も、学問的な研究を標榜とする方であればご参加下さい。

今後は、歴史の中の市・商人・職人・産業流通などを考えることのヒントをみつけることを目的として、築地場外市場周辺の観察、見学会なども予定している。

こうした諸活動をとおして先人たちの遺跡遺物・文化財の一つ一つと対話することで、人間の歴史についての理解を深めたい。参加する各自が、課題をもって学んでいくことを期待したい。

Free Talk—文化財学会を語り合う—

参加者：学会委員

関	幸彦	(文化財学科教授)
尾崎	正善	(" 専任講師)
川崎	大樹	(文化財学科2年)
小泉	亜由美	(")
富川	武史	(")
阿部	潤	(")
唐沢	陽子	(" 1年)
山田	洋	(")
友部	愛子	(")
渡辺	徳子	(")

関：今日は寒いところを参加してもらってありがとうございます。文化財学会のこれからを語り合うというのが目的というわけだ。昨年の10月に総会が開かれ、学会が誕生したのだけれど、出来たてホヤホヤで右往左往しているうちに数ヶ月がすぎてしまった気がする。短い期間で何ができたのか。あるいはやり残したことは何か。各自がそれぞれに考えていることもあると思う。ここに参加しているのはまだ1年生と2年生しかいないが、われわれの敷いた路線が一つのモデルになることもある。要は「未来の先例」をつくる作業に参画しているというつもりで、いろいろな意見を出してもらいたい。ともかくわれわれの文化財学会が独り立ちしようとしている。会報もこうして出来上りつつあるようだ。君たちも、初めての経験でいろいろと苦労したと思うけれど、感じたことを自由に話してほしいと思う…。

尾崎：難しいことなんか考えようとせず、思うままに話そうじゃないか。そこでどうですか？。口火を切る形で友部さん。

友部：え～。勘弁してくださいよ。なんで私からですか。何について話せばいいか。先生たちの方から質問しながらやって下さいよ。

関：たしかに切り口が大きすぎるので、少しストライクゾーンをせばめることにしよう。

まずは学会とは別に文化財学科を志望した理由あたりから話してよ。

友部：何だか、面接試験の質問みたい… (笑い)。ともかく、うちの大学の最大の魅力は、1年生から実習があり、自分たちが身をもって体験できる学問だということかな…。

小泉：私も文字史料としての文献の歴史だけではなく、皮膚感覚で文化財にタッチできるというのが一番の理由かな。特に文化財の保存技術の取得はこの学科への期待の最大のものとおもっています。

尾崎：2年生はこう言っているけれど、1年生はどう？。今年実際に授業に出てみて、自分たちが思い描いていたのとどこが違っていた気がするだろうか？。

阿部：ぼくは別にゴマをするわけじゃないけれど、結構満足していますよ。人数はマスプロ大学に比べ少ないし、先生たちとの交流も多い。他の大学に行った友だちの話を聞いても、1年生のうちから、先生たちとこんなに接触できるなんて少ないようですよ。

唐沢：それはそうだけど、1年生の実習IAで博物館を見学したり、研修旅行、あるいは鎌倉史跡めぐりと、盛りだくさんで楽しいけれど、毎回のレポートは大変だった。

関：それはそういうものだ。ともかくだ。鉄は熱いうちに打て、というように、君たちへの期待値もそれだけ高いというわけだ。それはそれとして、昨年の10月に小さな第一歩をふみ出した文化財学会そのものについて、話を移したい。みんなには半ば強制的に委員になってもらったわけだが…。文化財学会に何を期待するかと点で、どうだろうか。

富川：そうですね～。僕は設立大会・懇親会の際に宣言したように、壁画の修復なんかの技術を身につけたいのですが、それはツーステップぐらい先のことで、大学の学科それ自体には自分がやりたいことが百パ

ーセント満足させるものはない。これはどの大学でも同じだと思うので、結局は本当に自分がやりたい分野がわかっただら、自分自身が動かねばなにもできないことがわかったということです。だから学会には、学科の講義を補充するというよりは、全く別の角度でわれわれの学的関心にもとづくものを求めたいと思うのですが…。うまく表現できませんが…。

関：なるほど。いまの富川君の発言は学科と学会の関係について考えるうえでいろいろな問題が提供されているみたいだね。同じく2年の川崎君はどう考えているの。

川崎：僕は宮城県出身ということで、東日本で最初の文化財学科にすごく魅力を感じるけれど、正直のところ、学科と学会の関係がいま一つはっきりわからないのですよ。先生がよく学会は学会員が協力しながら創り上げるものだという話をされますが、学会の役割って何だか……。何となくもやややしてわかんないんですよ…。

尾崎：正直な感想だと思うよ。君たちは先達となるべき先輩がいない。その分自由だけれど自分たちが全てを切り開いてゆかねばならないわけで、モデルがないことは不安もあるはずで、高校生までの世界とはいささか勝手がちがうこともうなずける。

関：難しいことは別にしても、要は文化財学科というのは大学という法人の組織を担うもの、学会は学校という枠組みとは別のもの。つまりは自らの意志にもとずき参加の可否を決めることができる、組織ということになる。例えば単純に言えば、この大学を卒業した場合、卒業後の卒業生の動向とか逆に在校生の動きを相互にキャッチボールできる場とでもいってよい。それは単純に親睦的要素だけではなく、純粹に学問的交流にかかわる問題だってある。と、同時に1年生から4年生までタテの関係について、相互に結びつける役割もこの学会にはある。その点ではタテ軸とヨコ軸をネットワーク

的に結びつける役割があると思うよ、一言で表現すれば文化財学科と学会は車の両輪ということになるね。

山田：ぼくも川崎先輩と同じく学会委員に指名されたけれど、ただ、言われるままに動いているだけで、主体的にかかわっている感じが薄いのですが…。

渡辺：その通りだけれど、もし、授業だけだとすれば、大学側が用意したカリキュラムを消化するだけだと、こうした形で2年生の皆さんと話し合う場なんかないかもしれないので、風通しという点では学会の活動は必要な気もする。

友部：私は学会に対して期待するのは、みんなが積極的に調査研究の成果を発表できる場を提供してくれること。そして学年という枠を越えて、人間関係の交流の場でもあってほしいと思います。

小泉：そうだよね。授業として学べないような、貴重な体験をしていきたいと思います。

尾崎：そのことは、われわれもふくめた学会全員がこれからそうした方向に学会をもつてゆくことが必要なわけだろう。

唐沢：でも、文化財学がすごく難しいのは、新しい学問分野だからでしょう。ある意味ではいろいろな学問の接合という感じかな。私は保存科学をやりたいと思っているけれど、各自の方向がふつう史学科よりも多岐にわたっているだけに、学問としての分野の自立性というかそれがどうなのかという感じですけど…。

阿部：でもさ、21世紀というのはわれわれの文化財学の時代じゃないのかなあ～。史料(文献)と考古学と、保存科学とが接合した総合学の姿はおもしろいと思うよ。

富川：おもしろいけれど、幅広いだけに、故郷というか核がないのは何となくさびしい気もする。要するに僕が言いたいのは、固有の専門的領域が無くなるのはまずいのは、と思うのです。

川崎：でもさ、それは考えようだと思うなあ、

僕はこれまでの学問分野は住みわけが厳しすぎて、それが相互の交流をじゃましてきたと思うよ。

山田：相互の交流ってすごくカッコ良いけれど、それはぼやけている感じですよ。そのあたりは総合をめざす文化財学の宿命みたいなものがあるのかもね。

関：何だか、学会それ自体の話よりは、いささか格調高い本質的な議論の方向に近づきつつあるようだね。以下は私の個人的な意見ということで聴いてほしいが…。私は純粹たる文献史学出身で、考古も民俗学もあるいは保存や修復についての技術の知識はない。でも、この文化財学という学問の重要性はわかる。ただその時に単に総合学という点で文化財学を評価するのは少し問題が残るかもしれない。

小泉：どういうことですか。

関：極端なことと言えば“違いがわかる～”というコマーシャルがあるだろう。その例にならえば、各学問分野の限界を各自がしっかりと把握してほしいわけさ。つまり、手法の違いや証明すべき手続きの方法について各分野の違いを明確にしなければならぬ。例えば文献史学と考古学の融合と言っても、限界はある。そうした限界にどれだけ自覚的に対応できるかということだ。そういう意識を持たねば、学問相互が迎合してしまう気がする。それは民俗学と歴史学との関係でも同じことだ。文化財学科という名のもとで安易な結合は避けるべきだ。だから個人的には文化財学科の学生には、厳しい注文かもしれないが、新しい方向分野であることのおもしろさと同時に、そこに落とし穴もあることを自覚してほしい。その上での学的融合ならば大いに賛同したいね。

尾崎：話をもどして、学会の活動ということ言えば何が必要だと思う？

富川：そうですね。ともかく学会の部会をどれだけ活発にするか。そしてその部会にど

れだけの人たちを参加させることができるかが、最大の課題だと思いますね。

例えば、研究部会の活動を金銭的に援助してもらおうとか。特に学生にとっては、そうしたバックアップが必要だと思うのです。

尾崎：ちょっと今の文化財学会の部会は少なすぎる気がする。みんながとまどっているのはわかるが、学会に対する積極的なかわり方が不足しているみたいだね。

渡辺：それはわたしたちの各委員のアピールの仕方が足りないということですか？

唐沢：単純にそれだけではなくて、上意下達的にでき上がったものだから、いまは一人立ちできないけど、時間がたてばそれなりに形となると思うよ。

阿部：たしかに一人立ちするまでは、まだ少しの時間が必要なようだ。今後は会報だけでなくて会誌という学術雑誌もつくることが要求されることになるし…

小泉：「少年老い易く学なり難し」というところかなあ～。

川崎：「日暮れて道遠し」だけれど、僕たちには、未開だけれど豊かな道が広がっている。ともかく小さな一歩だけれど、踏み出すしかないみたいだ。

友部：川崎君、それって寒くない？（笑い）

関：まあよいではないか。ともかく君たちにはみんなに学会の目的や活動について、大いに宣言してほしいと思う。

川崎：先生どうでもいいけれど、カッコいいこと言いすぎて少し腹が減ってきました。何とかして下さい。

尾崎：それじゃ、ピザでも食べに行こうか、ただし割り勘で！

全員：それはひど～い。先生おごって下さいヨ。

関：君たちとぼくらは平等に全員で上下はない。だから学会にあってはみんな公平、平等だ。そんな原理、原則を言ってもしょうがないね。まあ今日はごほうびということにしようかね。（拍手）

- 3 会誌・会報等の編集刊行
 - 4 親睦その他の事業
 6. 本会に次の役員を置く。
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
 7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに当てる。
 8. 本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。
- 付 平成11年10月16日から発足する。

学会の年間行事予定

- 6月10日（土）
文化財学会総会（春季）午後1時から
文化財学会講演 午後2時30分から午後4時
- 6月11日（日）
学会親睦会（鎌倉由比ヶ浜）
地引き網の会
- 11月25日（土）
文化財学会（秋季）午後1時から
シンポジウム、その他 午後1時から

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦はかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催

編集後記

鶴見大学に文化財学科が作られてから2年目の今年度、私たちの文化財への興味関心を高めるために、文化財学会は誕生しました。最初の学会委員は2年生が4人、1年生が4人の計8人です。10月に学会が設立されてから、研究部会を承認し、この「文化財学会報」をつくり発行することで、今年度の仕事は終了です。初めてのことばかりで、結局先生方に頼った活動になってしまいましたが、来年度はぜひとも、「私たちの」学会になるように努力したいと思います。（編集委員）

鶴見文化財学会報 vol.1 訂正とお詫び

鶴見文化財学会報 vol.1 に下記の誤りがございました。訂正をしてお詫び致します。

記

・ P5 「Free Talk ー文化財学会を語り合うー」

参加者一覧の、阿部 潤と友部 愛子が逆となり、正しくは友部愛子が文化財学科 2 年、阿部潤が文化財学科 1 年となります。

以上

また、非常用的な言い回し、漢字などは執筆者の表現を尊重するため、発刊した時の文章のままで掲載させていただきます。ご了承ください。